



## 勉強し(学び)続けるという道(人生)の歩き方

高校入試が近づいています。

昨年度と変わったのは、県立高校で約一週間、スケジュールが早くなり、多くの生徒の受検科目が三科目から五科目に増えたことです。この意図は何か。これは「五教科をしっかりと勉強してきなさい」、別の言い方をすれば「たくさん勉強することに慣れてきなさい」ということなのだと思います。



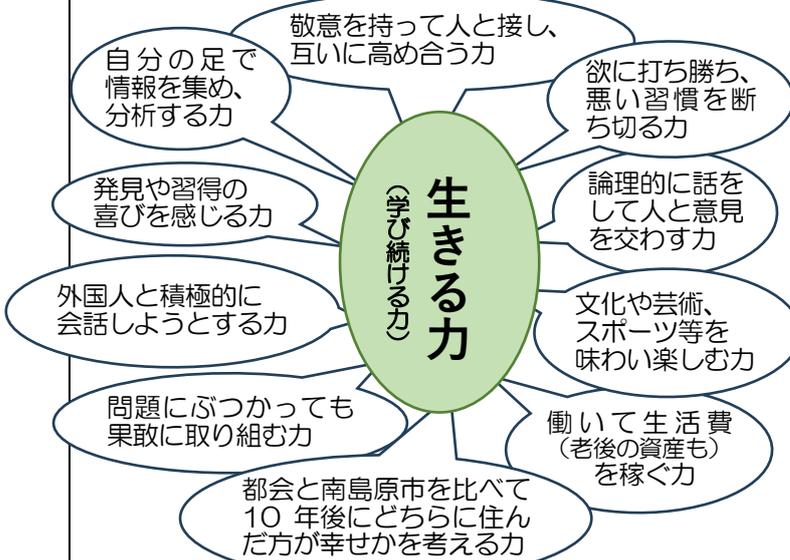
高校での授業の教科数は大きく増えます(中学校では九教科、高校では十三教科になります(口加高校普通科普通コース一年生の例)。福祉科や他の実業系の高校では、全く新しい教科を学び、自分で申し出て挑戦する「資格を取得するための試験」というものもあります(これが大事!)。このような世界では、「自分を鍛える力」や「主体性」、「積極性」が求められるのですが、「何か楽な道はないかなあ」と考えている生徒には辛いものになります。だから、勉強するのは、入試の日までではなく、その後も!です。高校の入学式の前までに足りない部分を補充し、高校へ行って部活動をする人は、体を鍛えておくことも必要です。「学び続ける」という習慣は、その後の人生においても、とても大事な資質・能力だと、私自身、六十年の人生を振り返ってつくづく思います。がんばろう、三年生!

## 激動の時代に 身につけたい資質・能力

これからの世の中は「人口減少」による労働力不足や外国人人材の登用、「人工知能の発達や高度情報化」によるロボットや自動運転の拡充、「価値の多様化」による新商品の開発や既存商品の見直しなど、大きな変化が予想されています。

そこで必要なのが上段で記した**学び続ける力**です。広く言えば「生きる力」と言われるこの力を細かく分析してみました。「**受験は団体戦!**」として臨めば、これらの力の内、多くも高まると考えています。

### 生きる力 (学び続ける力)



《コラム 港町ブルース》

## 「キツイ時を乗り越えて」

修学旅行の引率で初めての感涙。その訳は…。旅行で一番大事なものは、最終日です。疲労や寝不足となりそう、おまけに前日の夜のことで…(これは伏せておきます)。そんな彼らが心機一転、バスの中で「最後まで盛り上げていこう」とレク係のリードで歌い続け(いわゆるカラオケ)、普段はおとなしい生徒も隠していた姿を披露して大盛り上がり。最後の曲は…? 「みんなで合唱コンクールの歌を添乗員さんと運転手さんにプレゼントしよう!」となったのです。その気持ちと歌声が素晴らしく、涙が溢れて止められませんでした。

「困難や苦悩を突き抜けた先には見えない景色」があると思っています。これを実際に感じる事ができたこと。これが今回の修学旅行の一番の収穫です。彼らは今後、苦しいことがあっても「ヨッシャーもう一本!」と言って限界を超えていってくれると期待しています。記憶に残るとてもいい修学旅行となりました。ありがとう。



## 《 主な行事予定 》

### 《令和6年度12月》

- 5日(木) 人権集会、合唱コンクール 学年・学級育友会
- 7日(土) 少年の主張弁論大会 (原城オアシスセンター、午後1時30分~)
- 10日(火) 生徒会役員改選
- 24日(火) 終業式(給食あり) 生徒会役員任命式

### 《令和6年度(令和7年)1月》

- 8日(水) 始業式(給食あり) 実力テスト(3年生)~9日
- 9日(木) 市学力テスト(1・2年生)
- 28日(火) 公立高校特別選抜検査

### 《令和6年度(令和7年)2月》

- 4日(火) 学年末テスト(3年生)~6日
- 18日(火) 公立高校一般選抜検査~19日
- 19日(水) 学年末テスト(1・2年生)~21日
- 25日(月) 授業参観、学根育友会、評議員会

《心に響いた言葉》 「バスの移動時間でのレクレーションがみんな盛り上がり楽しかった。」

2年生「修学旅行で一番楽しかったこと」から。



シリーズ「学校教育の充実」

第一期南島原市教育振興基本計画から

〈第九回〉 教職員

南島原市教育振興基本計画の「教職員」の欄には、次の施策が記されています。

高い専門性と豊かな人間性を持った品格のある教職員を育成するために、南島原市教職員研修などを通して、実践的な教職員研修を行います。

この他に、特別支援教育助手の配置やいつでもネット上で研修ができる仕組み、様々な休暇が用意されていることなど、私の若い頃（三十年前？）に比べると、随分と教員とその業務を支援する制度が充実しています。本当にありがたいことです。ただ…。

先日、長崎新聞の「声〳〵若い広場」の欄に、次のような投稿がありました。

〈教員の勤務を生徒から見て〉諫早市 大島（14）  
 「（中略）僕の父も高校教師ですが、毎日夜の8〜9時くらいに家に帰ります。しかも土日の休みはほとんどありません。帰宅した父を見ると、いつも大変だなと感じます。（中略）僕は先生の言うことを素直に聞いて、一生懸命授業を受けることが、一番の感謝の返し方だと思います。」  
 （令和六年十一月十九日「長崎新聞」声〳〵若い広場）から

この記事を読んで、いい子だなあと感じた次第です。

一方、教員の採用関係では、今、危機を迎えている「採用試験日の前倒し」など、いろいろな対策が取られているのですが、「採用試験受験者の減少」「合格者の辞退」「中途退職者の増加」などの状況があると言われています。

〈そこで、中学校（本校）では〉

教員の成り手不足の一番の原因は「人口減少」なのだと思いますが、時間外まで働くことが多い仕事の仕組みと、この時間外の仕事に「残業代」が出ないことに、学生たちが気づいてしまったことは大きかったと思います。

教師の仕事は、それが業務に当たるかどうかという「線引き」が難しいと言われます。

本校の場合は、授業や特別活動（行事、生徒会活動、学級経営など）の指導、それに伴う準備や後片付け、評価活動等は、できるだけ勤務時間内で行いましょうと言っています。そして、「人格の完成」を目指して「生きる力」を育むことを使命として受けているので、自分自身が生徒たちの生き方の手本（反面教師より「憧れ」の対象となるような生活をしましょう。未来は激動の中にあります。教師自身が様々な経験を積み、知見を集め、ものごとを深く考えて、人が歩むべき道について「自分の考え（信念）」を持たなければ、授業や生活指導等が薄っぺらなものになるという危機感を感じています。

たとえば、教師自身が旅に出て、人に会ってその土地を知るとか、被災地のボランティアに参加するとか、検定試験を受けるとか、そんなことのほか、家族を大切にすることか、地域との関わりを持つとか、夕日や星空、何気ない景色に感動する感性を持つとか…。そんな経験と思索が人間力を高め、授業等に厚みを持たせるのだと思います。

指導力と人間力を兼ね備えた「教師力」が高まる環境づくり、これが本校の働き方改革、名付けて「Work based on Life」です。



ふるさとの文化・歴史・人物 ― 口之津中教育の視点から

「天草四郎」

天草四郎は江戸時代初期に天草で生まれ、そして南島原（原城）で短い人生を終えた人です。

天草四郎は益田甚兵衛の長男として生まれ、本名は益田四郎といえます。長崎で学問をしたことなどが知られています。（中略）

人々の不安の中で、四郎こそが予言にある天の使者に違いないという噂が広まり、ついには一揆勢の総大将に担ぎ出されました。総大将とは言ってもそのシンボリックな存在であり、実際に指揮を執ったのは、父甚兵衛ら側近たちであったと言われています。 〈天草四郎観光協会 十〳〵から〉

人々の心の拠り所となった彼の年齢は、この時、十代半ばだったと伝えられています。あの時、何を想い、どのような立ち居振る舞いをしたのかを考えると、自分を見つめる教材になるかと思えます。

十二月三日、三百八十七年前のこの日、天草四郎は原城に入りました。これから約三ヶ月後の二月二十八日、乱は終わりました。



原城跡 天草四郎像

【お知らせ】

来る十二月五日（木）、本校体育館にて合唱コンクール、人権集会（小さな劇形式で発表します）を開催し、その後、学年・学級育友会が行われます。生徒たちの歌声や発表などに御期待ください。

御参観をお待ちしています。

